

銀

賞

『悠久の手紙』

悠久の手紙

兵庫県 神戸星城高等学校二年 眞弓 璃子

ぼくが不思議な文通を始めたのは、中学二年生の秋だった。帰宅部だったぼくは、授業が終わるとすぐに帰路についていた。生徒はほとんどみんな部活に行ってしまうので、ぼくが帰る時間帯の昇降口^{しやうこうぐち}はいつも閑散^{かんさん}としていた。夏休み明けでまだ暑い季節だったので、誰も見ていないのをいいことにシャツの第二ボタンを外しながら、靴箱^{くつばこ}を開けた。

目に入ったのは、ぼくのスニーカーの上に鎮座^{ちんざ}している、一通の手紙だった。コピー用紙よりも少し分厚く、ざらざらしている。ひっくり返しても名前はない。恐々^{おそおそ}開いてみる。

『むむむ……ですか』

幼児^{ようじ}のような拙い^{つたな}ひらがなで、それだけが書かれていた。差出人も宛名もない。もしかしたら、間違^{まちが}って入れたのかもしれない。

無視してもよかったのだが、この手紙の送り主は、再びぼくの靴箱^{のせ}を覗くだろう——そんな確信が、なぜかあった。不自然な引力だった。ぼくは適当なノートをリュックから引っ張り出し、端^{はし}を破いてこう書きつけた。

『届いてますよ』

靴^はを履^かぎ替え、そのメモを上履^かきの上に乘せて、ぼくは校舎を出た。やっぱり友達^{ともだち}のいたずらだったかも、と不安に思ったが、翌朝登校して、それが杞憂^{きゆう}だったことを知った。靴箱のメモが消えて、代わりに昨日と同じ封^{ふう}

筒が入っていたのだ。ぼくは誰にもばれないように、ポケットに手紙をねじ込んだ。自分の教室がある三階まで二段飛ばしで駆け上がり、席に荷物を置いて男子トイレに駆け込む。

手紙は昨日のよたよたしたひらがなとは対照的に、鮮やかな筆記体の英語——恐らく——で書かれていた。内容さはさっぱりだ。

どうしよう、と思う間もなく、ホームルーム前の予鈴が鳴る。手紙を封筒ごと、丁寧に二つ折りにして、ポケットに突っ込む。

その日の授業はずっと上の空だった。

家に帰ったぼくは着替えるよりも先に、スマホで手紙の写真を撮った。写真から文章を読み取って、翻訳してくれるサイトを開く。

その手紙にはどうやら、英語でこんなことが書いてあるらしかった。

『あなたのポストと私のポストとを勝手に接続したことを許してください。私はあなたとは違う星に住んでいます。もし、この手紙を受け取ったなら、また返事が欲しいです』

いたずらにしてはよくできた手紙だな、と、ぼくは返事を考え始めた。別に、誰かのいたずらでもよかったのだ。日常の繰り返しに、こんなおとぎ話のようなことが起こるなんて。

ぼくは英語は得意ではない。考えた内容を翻訳サイトに入力し、それをそのまま、破ったノートの一ページに書き写す。

『あなたはどこに住んでいますか？　ぼくは地球という星です。あなたはなぜ地球の言葉である英語を話せる

んですか？ ポストを繋げたというのはどういうことですか？ あなたは誰ですか？ 返事待ってます』
ぼくは手紙を四つに折って、忘れないように、制服のズボンのポケットに突っ込んだ。

翌朝、ぼくは、書いた手紙をスニーカーの上に置いた。放課後には返事が来るだろうか。
授業が終わってすぐに昇降口へ行くと、スニーカーの上に、また封筒が乗っかっていた。

家に帰って写真を撮り、翻訳サイトを開く。

『ごめんなさい。私は名乗ることができない。ごめんなさい。私はこの言語を、ある人間から教わりました。
地球から来た彼は私達の言葉を学び、私達とコミュニケーションを取り、私達の言葉で、私に地球の言語を教えてくださいました。私のポストは、彼にもらったものです。宇宙空間の中で、指定した座標にものを送ります。私はでたための座標を指定しました。だから、返事が来ると思っていますませんでした。あなたは私の隣人です。どうかこれからも、手紙を続けてください』

その手紙からは何か、ある種の切実な運命が感じられた。どこにもそんなことは書いていないのに、なぜか、送り主は孤独なのかもしれないという考えが頭の中を巡っては消え、また現れる。広大な宇宙で、相手の言う「でたための座標」が指し示したのがぼくの靴箱だったことに、意味はないかもしれないが、意味のあることだけが運命ではないだろう。

『わかりました。手紙を続けます。ぼくたちは会うことはできないかもしれないけど、隣人です。あなたの星のことを色々教えてください。返事を楽しみにしています』

ぼく達の文通は、翻訳サイトを介して続いていた。朝、手紙を靴箱に入れておくと、夕方にはもう返事が来ている。持ち帰って返事を考え、翌朝また手紙を靴箱へ……そんなサイクルがしばらく続いた。

彼（性別さえわからないが、この先、送り主のことは便宜上こう呼ぶ）の星は、想像もできないほど遠くにあるらしかった。彼に英語を教えた人物はもう亡くなっているらしい。その人がなぜ彼の星まで行くことができたのかは彼も知らないようで謎のままだったが、近況や、お互いの星のことを教え合うのは、重大な秘密を抱えているようで楽しかった。

あるとき、彼が自分の星を「美しい水と、空と、色とりどりの花と、争いのある星です」と表したことがある。ぼくが彼に孤独を感じた理由が、そこに詰まっている気がした。

葉がもうすっかり色づき、本格的に秋めいてきたある日、ぼくだけの秘密の文通は、たったの三週間で終わりを告げた。

いつものように靴箱に手紙が入っていることを確認したぼくは、周りに誰もいないのをいいことに、その場で手紙を開いていた。紙にびっしり並べられた流麗な文字列を見て、ニヤニヤしていたのだ。

「なんだか嬉しそうですね」と、横からかけられた穏やかな声に驚いて、ぼくは手紙を取り落とした。紙がひらひらと舞う。

「あつ、ごめんなさい。驚かせましたね」

手紙を拾ったのは、隣のクラスの担任である、大西先生という中年の女の先生だった。担当教科は英語だ。優しくて授業も面白いので、一部の生徒からは「おおにつちゃん」と呼ばれているほど、人気のある先生だった。

声をかけられるまで、気配にすら気づかなかったことを反省しながら、手紙を受け取ろうとして、ぼくは動き

を止めた。大西先生が目丸くして、手紙を凝視^{ぎょうし}していたからだ。

先生はしばらく手紙を見て「これ、君が書いたんですか？」と顔を上げた。ぼくは誤魔化^{ごまか}せないということを悟^{さと}って正直に言う。

「いえ、違います。文通してるんです」

「文通？ ……英語で？」

「はい」

ぼくは事の一切を先生に話した。先生は時折頷^{うなず}きながら黙^{だま}って聞いていたが、ぼくが話し終わると「それ、先生にもお手伝いさせてくれませんか」とぼくに笑いかけた。

「お手伝いするので、翻訳機を使わずに返事を考えてみませんか。英語の勉強にもなりますよ、きっと」

「……ぼくにできるでしょうか」

「うーん、最初のうちは大変かもしれませんが、君は部活もやっていませんし……いえ、無理にとは言いませんが……秘密の文通、先生も興味があります。どうです？」

ぼくは頷いた。挑戦^{ちようせん}したい。少し面倒^{めんど}くさいけれど、その方が気持ちも伝わる気がする。

先生は満足そうに「ありがとう」と再び笑った。ぼくだけの秘密の文通は、ぼくと先生、二人だけの秘密の文通になったのだ。

ぼくと先生の秘密の手紙講座は、授業が終わった後、図書室で行われることになった。放課後の貸し出しチェックは図書委員会の顧問^{こもん}である大西先生の担当なので、人目につかない場所を、と先生が提案してくれたの

だ。

大西先生が今までの手紙を見せてくれと言ったので、文通のことがばれた翌日、計十三通の手紙を先生に手渡した。

ぼくの向かいの席で、十三通分を黙々と、しかしスラスラと読んでいた先生は、最後の一通を読み終えてふと顔を上げ、首を傾げた。

「君の靴箱が、送り主の言う『ポスト』の代わりということですよね？」

「そつだと思います」

「不思議なこともあるものですね」

話を続けるのを少しだけためらうような素振りを見せてから、先生はぼくから目をそらして、うつすら笑った。

「悪いけど、君は、英語の成績はあまりよくありませんよね」

「そんなにはつきり言わないでください」

「あはは、ごめんなさい。いや、手紙を書くうちに成績なんてポンと上がりますよ。来年は受験生ですし、頑張りましょうね」

頷く。そうなのだ。来年は受験生だから、もしかしたら、手紙を書く暇なんてなくなるかもしれない。そもそも靴箱がポストである時点で、ぼくが中学校を卒業したら、嫌でも文通は終わる。ぼく達は刹那の隣人だった。

その日は先生に文法や単語を教えてもらいながら、こういう手紙を書いた。

『ぼくは英語が得意ではありません。実は今まで翻訳機を使っていました。でも、今日からは、英語の先生に教えてもらいながら、自力で文章を書くようにします。読みにくくなるとは思いますが、よろしく願います』

消しては書いてを繰^くり返したので、紙はよれたし、黒ずんでいたし、書くのに一時間もかかった。しかし、先生が「いいと思いますよ」とお墨^{すみ}付きをくれたので、自信は持てた。

手紙を靴箱に入れて校舎を出る頃には、もう五時を回っており、日も傾き始めていた。いつもより頭を使ったはずなのに、疲^{つか}れてはいない。ぼくは足取り軽く、帰路についた。

彼は、ぼくが自力で手紙を書くということを聞き「これからあなたの心からの言葉が聞けることを嬉しく思います」と喜んでいた。

それからは今までのサイクルが逆になった。放課後、ぼくが先生と一緒に手紙を書いて靴箱に入れておくと、翌朝に返事が届いている。初めの頃は違和感^{いかん}があつたが、半年もすればその違和感はすっかりなくなっていた。

四月、ぼくは順調に三年生になった。担任は二年生の時と同じで、大西先生はまた隣のクラスの担任だ。靴箱は三年間同じ場所を使うので、文通は続く。

ぼくは進級した日の手紙にこう書いた。

『ぼくは今年、大切な試験があります。そのための勉強をするので、今までのようなペースでは、手紙を出せないかもしれません。でも、できるだけ返します。なので、これからも手紙を送り続けてくれると嬉しいです』

一年後にはもう、ぼくは中学校を卒業するので、文通はできなくなります——それは言わなかった。先生は「早く言ったほうが、自分も相手もショックを受けずに済みますよ」と言ったが、ぼくは意志を変えなかった。まだ先なんだから、伝えるのはもつと後でいい。そう思っていたからだ。

そして、翌日、返事は来なかった。

春休み中は毎日学校に来ることができず文通が不定期になっていたもので、その名残だろうと特に気にしてなかったのだが、返事は何日経っても来なかった。怒ったのだろうか。

手紙を送ってから一週間後の朝、靴箱を開けたばくは、ほっとした。手紙がある。放課後をあれほど待ち遠しく感じたのは初めてだった。封筒には便箋以外の何かも入っているようで、普段より重く、そして膨らんでいた。放課後、図書室でいつものように先生と向かい合って、手紙を開封する。

『そうなんですね。あなたの試験が成功することを心から願っています。お守り代わりと言ってはなんですが、星の石を送ります。これを渡すために探し回っていたら、返事が遅れてしまいました。ごめんなさい』

どうやら、怒ってはいないらしい。それどころか、プレゼントも貰ってしまった。

封筒から、便箋といっしょに滑り出た「星の石」は手のひらサイズで、青い半透明で、ごつごつしていた。蛍光灯の光を反射して、キラキラと光る。先生は子供のような表情で「いいなあ」と、うっとり石を見つめた。

「宇宙から来た石ですよ。大事になさい」

「はー」

ばくは素直に頷いた。今まで貰ったどんなプレゼントよりも嬉しかった。

今日の手紙は石のお礼と、受験のことを書く。そう思って、ペンケースを漁っていると、先生が「あれっ」と声を上げた。

「これ、続きがありますよ。一枚目が」

えっ、と声が漏れる。そんなこと、初めてだった。なんだか嫌な予感がある。

『言おうか迷ったのですが、あなたには打ち明けます。実は先日、召集命令が私に届きました。戦争です。無

駄な争いです。私は行かなければいけません。あなたと同じように、私もまた、手紙を出す頻度は落ちるでしょう。でも、あなたも送り続けてください。あなたからの手紙は、きっと私に勇気を与えます』

彼の言った通り、彼から手紙が来る頻度はぐっと下がった。それでも、ぼくはできるだけ手紙を書き続けた。夏になると、塾に通い始めたり、高校の見学会に行ったりするようになった。日常は穏やかに通り過ぎていった。ぼくの生活の様子なんて、そんな脳天気なことを書いていいものかと思っただが、彼は言ったのだ。ぼくの手紙が、彼に勇気を与えると。だから、どれだけ彼のことが気になっても、いつもと調子が変わらないように心がつけた。

蒸し暑い夏の朝、やはり靴箱に返事が来ていないことに寂しさを覚えながら、いつものように登校すると、なんだか教室が騒がしい。先に来ていた友達の肩を叩き、何があっただのかと尋ねると、そいつは興奮気味に「おおにつちゃん倒れたんだって!」と叫んだ。

そのときぼくがくらくとしたのは、夏の暑さのせいばかりではない。

大西先生は学校に来なくなった。病を患ったそうだ。しばらく入院して療養する、という話を集会で学年主任から聞かされ、代理の英語の先生が紹介された。若くて綺麗な女の先生だった。友達みんな、新しい先生に英語を教えてもらえることを喜んでいて。手紙のことを話そうか迷ったが、言わなかった。

一人では図書室に行く気にもなれず、久々に真つ直ぐ家に帰ったぼくは、お母さんの「あれ、今日は早いね」という言葉に、うん、とも、ううん、ともつかないような返事をして、自分の部屋に入った。

彼の星では、戦争が激しくなっているらしい。手紙は、一ヶ月に一度、届くか届かないかの頻度になっている。なかなか家に帰れないのだそうだ。彼の家族が機械か、誰が回収しているのかはわからないが、それでも手紙は毎日回収される。その事実だけが、ぼくと彼とを繋ぎ止めてくれた。たまに届く彼からの手紙に近況きんきょうが書かれることはほとんどなく、ぼくの手紙に言及げんきゅうする内容ばかりだった。それでもよかった。生きてさえいてくれれば。

ぼくの手紙は、どれだけ彼の支えになれただろうか。彼はぼくの手紙を待つてくれている。ならば、ぼくが顔も知らない彼にできることはただひとつ、手紙を書き続けることだ。

季節はぼくを乗せて、止まることなく進む。いつしか文通を始めて、一年以上が経っていた。冬、受験が近づいて、みんなピリピリしていた。ぼくは勉強の合間を縫ぬって手紙を書いた。受験勉強で英語に苦勞させられずに済んだのは、そのおかげだろうか。

季節は進む。止まることなく。ぼくは受験に合格した。合格したことを中学校に伝えに行くと、担任の先生はとても喜んでくれた。大西先生のことを聞くと、先生は首を傾げて「あまり思わしくないそうだ。なんか、手術がどうとか」とあやふやな返事をぼくにくれた。先生も、詳しくは知らないらしい。

ぼくは先生にもう一つ聞いた。

「あの、図書室って開いてますか？」

図書室に来るのも半年ぶりだ。大西先生の代わりに、ベテランのおじいちゃん先生が貸し出しの担当になって

いた。カウンターに会釈をして、お気に入りの席に腰を下ろす。ペンケースと便箋を机の上に広げる。

『お元氣ですか、ぼくは元氣です。最近手紙を書いていなくてすみません。』

試験に合格しました。あなたがくれた石のおかげです。星の石が、どんなときもぼくを勇気づけてくれました。あの石が、あなたの代わりにぼくを応援してくれているような気がしていました。

実は、もうすぐぼくは、あなたとの文通を終えなければいけません。新しい環境に進むからです。ぼくのポストは、新しい人が使うことになりました。次の人が、あなたの手紙に返事を書くかどうかはわかりません。

あなたの手紙の内容は知らないことばかりで、とても楽しかったです。嬉しかったです。

名前も声も知らないけれど、それでもぼくは、あなたのことを友達だと思っています。

今までありがとう。感謝の気持ちを込めて、地球の花を送ります。

あと少しの間、よろしくお願いします』

ぼくは封筒に便箋と、いつの間にか咲いていた梅の押し花のしおりを入れて、封をした。

大西先生は卒業式に來なかつた。

その日は小雨が降っていて、咲き始めたばかりの桜の花を散らしていた。三年間過ごした校舎と別れるのも、友達と進路が離れるのも悲しかったが、それ以上に、ぼくは手紙の返事が氣になった。今日で最後なのだから。

押し花を送った後、返事は一通も來ていない。でも、ぼくは、ほとんど毎日手紙を書いて、彼に送った。たかが紙切れ一枚だが、されど紙切れ一枚なのだ。それはぼくだけでなく、彼にとっても同じだっただろう。

昨日も、手紙は送った。返事は來ているだろうか。最後だからと教室で騒ぎ立てる友達をよそに「親が待つて

るから」と嘘をついて、ぼくは一人でそと教室を抜け出した。

昇降口への階段を駆け下り、靴箱を開ける。

思わず息を呑んだ。

手紙が入っている。

震える手で触れてみると、やはりざらざらしていた。裏返してみても勿論、名前はない。鼓動がどんどん早くなって、顔が熱くなってくる。辺りはしんと静まり返っていた。

破いてしまわないように、ゆっくり開封する。そこにいつものしなやかな筆記体の文字列はなく、ただ、短い言葉だけが並んでいた。

ぼくは便箋を封筒に戻し、潰れないように、丁寧に鞆に入れた。

卒業式から帰ってきて、ぼくはすぐに便箋を出した。大西先生に手紙を書く。

遠い遠い星に送った手紙は、時空を超えて、彼を助けただろう。彼がぼくを支えたのと同じように。ならばもっと近く、手の届くところにいる人にも、ぼくは力を渡せるはずだ。

ぼくは不思議な運命を持っている。誰かを支える力を。ぼくだけではない。生きているもの、宇宙に存在しているものすべて、不思議な引力を持っているのだ。時に離れてしまつことがあっても、いつか必ず再び引き合つ。きっとまた会える。そう信じている。

最後の手紙には、震えた小さな日本語で、これだけが書かれていた。

あなたの返信に 心より感謝を
ありがとう いちばん遠い 友人よ